

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 8 月 31 日現在

機関番号：34426

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2012～2014

課題番号：24650376

研究課題名(和文) 知的・発達障がい児・者キャンプの意義と可能性に関する実証的研究

研究課題名(英文) Perspectives on the Benefits of Camping for People with Cognitive and Developmental Disabilities

研究代表者

竹内 靖子 (TAKEUCHI, YASUKO)

桃山学院大学・社会学部・准教授

研究者番号：30554208

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：キャンプ活動が知的・発達障がい児・者の「生活の質」「自立」「発達」にいかに関与できるのかアメリカと日本のキャンプについて実証的に研究した。

知的・発達障がい児・者対象キャンプ関係者への聞き取り、大阪市とその近郊のキャンプ実態調査、知的・発達障がい児・者対象キャンプ実践を行い、「参与観察」ならびに参加者とその家族への「質問紙調査」によりデータを収集し検討した。結果、キャンプ活動は、参加者の「生活の質」「自立」「発達」に良い影響を与えていること。参加者に加え家族やキャンプ関係者も「成長」する機会を得ること。良い影響を継続するためには個別支援や運営に工夫が必要なが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to determine if camping can improve Quality of Life(QOL) for people with cognitive and developmental disabilities.

The benefits of camping for subjects were examined: 1) by interview and observation of traditional camping organizations in the United States and Japan; 2) by mailed survey to learn about current camping conditions in Osaka, Japan; 3) by interview, observation, and survey about overnight camping activities in Japan.

Results indicated: 1) Camping facilitates improvements in QOL and development for people with cognitive and developmental disabilities. 2) Camping also improves QOL for their families and camping staff. 3) The importance of individual, organizations, and effective management in achieving these positive effects.

研究分野：体育学 野外教育 福祉レクリエーション

キーワード：キャンプ 自然体験 発達障がい 知的障がい 事例研究 実態調査 国際研究者交流 セラピューティック・レクリエーション

## 1. 研究開始当初の背景

文部科学省が実施した調査(2012)によると公立小中学校の通常学級に、発達障がい、もしくは似通った姿を見せる子どもが、6.5%ほど在籍している可能性が示唆されている。さらに発達障がいの中でも自閉症スペクトラムが際立って増加傾向である。2005年「発達障害者支援法」が成立し、発達障がい児・者やその家族に対する医療・保健・福祉・教育・雇用など複数分野への総合的支援スタートに伴い、支援方法への関心が高まっている。教育研究は数多くみられるが、知的・発達障がい児・者の余暇・野外活動に関しては実践報告レベルが多く、国内では系統だった研究は少ない。

日本では、知的・発達障がい児・者キャンプ活動に関しては、1970年代から「余暇活動機会の保証」「楽しみ」「発達」「自立」支援を目標にさまざまな団体により行われている。下記の事例から、「生活の質」や「地域交流」を促進するためにもキャンプは行われてきたと考えられる。

### 【キャンプ経験者Aくんの事例】

中学生の頃、キャンプに参加していた知的・発達障がいのあるAくんは、両親と生活しながら作業所に通っていた。この先もずっと一緒に暮らすだろうというご両親の考えと違い、作業所メンバーと作ったグループホームに喜んでいくというAくん。理由は、「子どもの頃キャンプに行って楽しかったからグループホームもきっと楽しいに違いない」と言っていたそうだ・・・(石田, 2010)

しかし、実態調査や活動の評価(効果)等、参加者本人の主観的・定量的・縦断的評価を測定した研究は少ない。

海外において、知的・発達障がい児・者キャンプ支援の意義・可能性を明らかにする文献は数多い。アメリカでは、発達障がい児・者にとって、キャンプは社会適応能力向上に有効な活動とされている。キャンプをすることにより、自立に必要な項目「他者を信頼する力」「サポートしてくれる人」「日常生活力」「社会適応力」は確実に高くなるとも考えられている。

特に1972年より、ノースカロライナ州で自閉症児の治療・教育を目的としたTEACCH(Treatment and Education of Autistic and related Communication Handicapped Children)プログラムを基に参加者の障がいの特性に合わせた個別キャンププログラムを提供する、ノースカロライナ自閉症協会が運営する「キャンプ・ロイヤル」等の実践や事例研究は、共生社会実現の貴重な情報となる。

自閉症のある人たちが見ている世界は、視

覚的で、独特の注意の向け方、感覚刺激の偏り、中枢性統合・実行機能が弱い傾向があり、構造化された支援や、関係づくりの工夫が必要である。支援(構造化・視覚化・ワークシステム等)の工夫は、国を超えて共通する支援方法であり、これらを実証的に検証することができれば、有効な支援方法を探る実践現場への貢献も期待できる。

これらの調査・先行研究から様々な専門家チームで仮説を検討し、実際のキャンプ活動を検証することで具体的なキャンプの意義・可能性・より明確な参加者のニーズに合ったキャンプの在り方・方法論を確立できると考えた。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、キャンプ活動が、知的・発達障がい児・者の「生活の質」「自立」「発達」にいかに関与できるのか、可能性を実践現場で検証することであった。

この目的は下記の3つの目標に取り組むことで、さらにキャンプ活動を通じた知的・発達障がい児・者の地域生活に必要な新しい社会ネットワークづくりにも貢献できると考えた。

- (1) 知的・発達障がい児・者対象キャンプの意義と可能性を知る。
- (2) 知的・発達障がいのある人対象キャンプ実践からの学びを総合的に分析し、意義と可能性を検証する。
- (3) 大阪市とその周辺における障がいのある人対象キャンプの実態を明らかにし、課題を抽出後検討する。

## 3. 研究の方法

3つそれぞれの目的を達成するために以下の研究を行った。

- (1) 知的・発達障がい児・者キャンプ関係者への聞き取り調査:

2011年、NPO法人キャンピズ(1998年設立、2002年NPO認証)主催キャンプ参加者・ご家族・スタッフを対象に「キャンプを通して得たもの」についてアンケート調査を行った。そのデータを、2012年に再度整理し、学会発表した。

2012年6月、40年間にわたり、年間を通じた自閉症児対象キャンプを行っている団体(ノースカロライナ州自閉症協会の運営するキャンプ場)を視察し、関係者にインタビュー調査を行い、団体のキャンプ報告書とスタッフトレーニングマニュアル等の運営に関する貴重な実践資料を整理した。翻訳と出版の承諾が得られたため、資料を翻訳し図書として出版、学会発表した。

2013年9月、アメリカニューヨーク州のウエストチェスター郡を中心に活動するスペシャルニーズのある子ども達と家族の会と東京・フロストバレーYMCA パートナーシップ関係者等にインタビュー調査を行い、小冊子等にまとめ報告した。

(2)知的・発達障がいのある人対象キャンプ実践研究：

年間を通して行われている発達障がい児・者対象キャンプ実践のうち、年3回(1泊2日)の軽度発達障がいのある小学生対象キャンプ参加者の「家族から見た参加者の変化」「参加者本人の感想」についてアンケート調査を行った。

2013年3月、NPO法人キャンピズの活動に長年参加している知的・発達障がいのある人の事例研究をスタッフと参加者とそのご家族とで行ない、小冊子にまとめ報告した。

キャンプ実践案(知的・発達障がい児・者対象キャンプ支援ガイドラインや家族と関係者の勉強会、地域での展開方法、等)は、調査の集計、分析、専門家と共に考察後実践しながら総合的に検討後作成し、現在も実践研究を継続している。

(3)「実態調査」大阪市とその周辺の障がいのある人のキャンプ実態調査：

大阪市とその周辺でどのような団体がどのように知的・発達障がい児・者キャンプを行っているのか、実態調査(アンケート)を行った。キャンプ評価方法についての情報収集も行った。それらをもとに、大阪府下在住の知的・発達障がい児・者対象に「キャンプ活動経験」と「活動満足度」「生活の質」「発達」「自立」に関する聞き取り調査につなげた。

実態調査-1

2012年11-12月、大阪市およびその近郊の福祉・野外活動関係団体476団体を対象に「障がいのある人の参加するキャンプの実施状況を確認するアンケート調査(郵送)を実施した。総合的に知的・発達障がい児・者キャンプ参加者への影響を分析するために必要な基本データを収集し、論文にした。

実態調査-2

2015年2月、2012年度調査で障がいのある人の参加するキャンプ実施していた70団体を対象に、「対象者の特性」「キャンプ日数」「実施場所」「スタッフ構成」「目的」「プログラム」「費用負担」「課題」についてのアンケート調査を実施し、野外教育学会(2015年6月)で発表した。

#### 4. 研究成果

本研究を行うことで、知的・発達障がい児・者のキャンプ活動は、「生活の質」「自立」「発達」によい影響を与えること。さらに、参加者に加え、「家族」や「キャンプ関係者」も「成長」する機会を得ることが示唆された。

(1)知的・発達障がい児・者キャンプ関係者への聞き取り調査：

NPO法人キャンピズ主催キャンプ参加者・ご家族・スタッフ対象に「キャンプを通して得たもの」についてアンケート調査(2011年実施)の自由記述をまとめると、「参加者」が

キャンプ活動を通して得るものとして、「いきいきしている」「自分からキャンプに行くようになった」「社会性や生活力が向上した(コミュニケーション・集団行動力・行儀など)」「行動範囲が広がった」「一人でできることが増えた」と記されており、知的・発達障がいのある人がキャンプをすることで、それぞれの生活がより豊かになり、それぞれの生活力の向上にも良い影響を与えていることがわかった。

さらに、「家族」にとっても、初日は不安度が高い傾向があるが、何度かキャンプ活動を繰り返すことで、子どもを「客観的な視点」でみることができ、「親子分離・子離れの練習」の機会となること。また子どもが楽しくキャンプしていることから、罪悪感なく、「リフレッシュ」「レスパイト」の時間がすごせると記されており、家族にとっても有意義な時間となっていることが分かった。

加えて、「スタッフ」も自身の変化を記している。キャンプ参加前には「支援したい」「支援しなければならぬ」という自分であったが、共に障がいのある人と生活することで、「できることでお互いに支え合う」共生の視点に変わったこと、そこから「障がい」に対するイメージが変化するとともに、「組織の一員として、役割を理解し動く」といった「社会性」が身についたなど、スタッフも成長する機会を得ていることが分かった。

2012年、ノースカロライナ自閉症協会の運営するキャンプ場「キャンプ・ロイヤル」への視察調査と実践資料の整理から、キャンプは、1.レクリエーション 2.療育・教育 3.家族のレスパイト 4.学生と専門家のトレーニング 5.障がいのある人の雇用・就職訓練の機会を提供するために行われていることが、事例研究とスタッフマニュアルから検証された。

2013年、アメリカニューヨーク州のスペシャルニーズのある子ども達と家族の会と東京・フロストバレーYMCA パートナーシップ関係者等へのインタビュー調査から、団体間で協力し合いキャンプ活動の機会を得ている事例をお聞きする機会を得た。障害者施設利用者もキャンプ団体の主催するキャンプに参加することも多く、キャンプ活動はアメリカでは、人気のある夏の活動であり、様々な団体が、スペシャルニーズ対応のキャンプを当たり前のこととして実施していることもわかった。

このことから、知的・発達障がいのある人のキャンプ活動が結果として、関わる人すべての「生活の質」「自立」「発達」を促進することが分かった。

(2)知的・発達障がいのある人対象キャンプ実践研究：

実践研究では、年3回(1泊2日)の軽度発達障がいのある小学生対象キャンプ参加者の「家族から見た参加者の変化」「参加者本人

の感想」についてアンケート調査を行った。「変化」についてのアンケートには、「友達ができた」「自分で何でも挑戦したがる」「お手伝いをしたがる」「親離れできた」「学校の宿泊実習が無理なくできた」などの意見を頂いた。参加者の感想も、「次回のキャンプでしたい事」「スタッフとまたあそびたい」など未来への希望や、他者への関心が広がっている内容であった。

このことから、学校や家族以外の他者とのキャンプが、参加者の自主性の向上につながっていることが示唆された。

キャンプ参加者の家族と関係者の勉強会は、「この子たちが大人になった時」というテーマで主に行われた。子どもたちの将来への不安が少しでも解消するよう、様々なアプリや機器を使った情報収集方法等、最新の研究者や実践者からの情報はこれからの実践に活かす予定である。

### (3)「実態調査」大阪市とその周辺の障がいのある人のキャンプ実態調査：

実態調査-1では、205団体中70団体が、2011年4月～2012年3月の期間に障がいのある人のキャンプを行っていることが分かった。さらに、1)「団体の特性」として、20年以上継続する団体が26団体あり、NPO法によりさらに多くのキャンプ実施団体が設立されたこと。2)「キャンプ対象者」については、主に「知的障がい」「発達障がい」のある人たちが対象に行われていた。

大阪市とその近郊における障がいのある人の参加する「キャンプ」は、「スタッフの確保」「プログラム」「資金」「医療面」やキャンプ施設や関連サービスの「リスク管理」等の課題もあるが、団体それぞれの工夫や努力で行われていることがわかった。

実態調査-2調査結果から、キャンプは様々な目的で行われており、実施(継続)するためには、障がいのある人の野外活動支援スタッフの育成と運営に関する支援と研究が必要であることがわかった。詳細は2015年度中に報告する。

以上、本研究において、知的・発達障がい児・者キャンプ活動の意義と可能性について明らかにした。日本の野外教育分野で、アメリカや日本の知的・発達障がいのある人対象キャンプ実践の横断的事例調査は、初めてであるため、広く普及していきたい。

さらに年齢・障がい・性別を問わずに行えるキャンプ：知的・発達障がいのある人の特性をキャンプ活動の中で理解する活動は、結果として地域の交流を促進し、防災訓練や新しい地域(福祉)ネットワーク強化も期待できるだろう。実践を継続するための課題を解決する方法についてさらに研究する必要がある。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計1件)

竹内靖子：大阪市とその周辺における障がいのある人のキャンプ実態に関する調査。桃山学院大学総合研究所紀要, 40(3):105-118, 2015. (査読無)  
[http://ci.nii.ac.jp/els/110009893558.pdf?id=ART0010421255&type=pdf&lang=en&host=cinii&order\\_no=&ppv\\_type=0&lang\\_sw=&no=1432400254&cp=](http://ci.nii.ac.jp/els/110009893558.pdf?id=ART0010421255&type=pdf&lang=en&host=cinii&order_no=&ppv_type=0&lang_sw=&no=1432400254&cp=)

[学会発表](計7件)

石田易司・竹内靖子・野口和行・多田聡・信達和典・中野堅太：障がい者キャンプの運営をどうするか，日本野外教育学会第18回大会，2015.6.19，国立阿蘇青少年交流の家（熊本）

Dan Ferguson, Kate Martin, Lyndal Gray, Yasuko Takeuchi, & Sara Peters: RECREATIONAL THERAPY PRACTICE AROUND THE WORLD: A GLOBAL DISCUSSION. American Therapeutic Recreation Association Annual Conference, 2014.9.16, (Oklahoma City, USA)

石田易司・竹内靖子・野口和行：自閉症と豊かな暮らし～キャンプ・ロイヤルから学ぶ～，日本野外教育学会第17回大会，2014.6.21，東京海洋大学（東京）

Yasuko Takeuchi: Therapeutic Recreation Interventions in Outdoor Situations for Individuals with Mental Disabilities. American Therapeutic Recreation Association Mid-Year Conference, 2014.3.10, (Maryland, USA)

Yasuko Takeuchi: Effects of Camping for People with Disabilities: Case Study in Osaka, Japan. 5<sup>th</sup> Asia Oceania Camping Congress. 2013.10.20, (Sydney Olympic Park, Australia)

竹内靖子・水流寛二・石田易司：障がいのある人の余暇・野外活動支援の輪を広げようプロジェクト実践報告，日本野外教育学会第17回大会，2013.6.23，京都教育大学（京都）

竹内靖子・水流寛二・石田易司：キャンプは楽しいだけじゃない！障がいのある人がどこでも楽しく活動するためにキャンプができること，大阪府キャンプ協会主催キャンプサロン 2013.6.9，ドーンセンター（大阪）

[図書](計3件)

石田易司・竹内靖子・野口和行：自閉症と豊かな暮らし キャンプ・ロイヤルから学ぶ，晃洋書房：2014，3-57.

石田易司・水流寛二・竹内靖子ら：NYの福祉・NPO・ボランティア研修報告，社会福

社法人光朔会オリンピック岩屋：2014, 3-8 & 16.

石田易司・水流寛二・竹内靖子ら：みんなががやくために CAMPING FOR ALL, 社会福祉法人光朔会オリンピック岩屋：2013, 3-6, 15-16, & 19.

〔その他〕(計5件)

ホームページ等

障がいのある人の余暇(野外)活動支援の輪を広げようプロジェクト:

[http://www.osaka.camping.or.jp/project/pdf/campo\\_83.pdf](http://www.osaka.camping.or.jp/project/pdf/campo_83.pdf)

大阪府キャンプ協会キャンプサロン 2013 「キャンプは楽しいだけじゃない」報告

[http://www.osaka.camping.or.jp/project/pdf/campo\\_85.pdf](http://www.osaka.camping.or.jp/project/pdf/campo_85.pdf)

NY の福祉・NPO ボランティア研修報告 2013. [http://www.osaka.camping.or.jp/project/pdf/campo\\_86.pdf](http://www.osaka.camping.or.jp/project/pdf/campo_86.pdf)

シンポジウム報告: 自閉症と豊かな暮らし ~ キャンプ・ロイヤルから学ぶ ~ :

<http://www.joes.gr.jp/wordpress/wp-content/uploads/2015/01/f218a15d1c48bab730b579f248e07951.pdf>

キャンプ・ロイヤルを知っていますか? ~ 参加者・家族・スタッフから見たキャンプとは ~ : <http://campwith.jp/pg291.html>

## 6 . 研究組織

(1)研究代表者

竹内 靖子 (YASUKO TAKEUCHI)

桃山学院大学・社会学部・准教授

研究者番号：30554208